

神奈川山梨教会連合会たより

かりん

信心を「求め」よう

金光教神奈川山梨教会連合会

信徒部次長 鈴木徳昭

新型コロナウイルスの感染拡大の中で連合会の打合せも、「ZOOM」によるオンライン会議となりました。オンライン会議は、自宅にいながら皆様とお話し出来ませんが、対面と違い、一体感を持ち難いですね。それでも、その場の雰囲気(?)で: : :。「かりん」の原稿を引き受けてしまいました。

さて、引き受けたがよいが、何を書こうかと思いがぐねっていたところ、奥川美智雄先生(平塚教会長)から、神奈川・山梨教会連合会主催「教師信徒研修会」における報告を渡されました。そこに、「縦横有神(じゅうおうゆうじん)」信心の喜びを語ろう」との講題で、浅野善雄先生(本中野教会長)の講話が載っていました。講話に感銘を受け、読み進めて行きました。また、「金光新聞(1321号)」を見ると、金光教首都圏フォーラムでの「信心の喜びを末

の末まで」との講題で、山田信二先生(横浜西教会長)の講話が載っていましたので、「YouTube」で山田先生の講話を拝聴しました。同じく「YouTube」で、長谷川兆伸先生(東京麹町教会長)の講題「おかげの答え合わせ」との講話も拝聴しました。

3人の先生方の講話を読み、聞いて、書こうとするテーマの道筋が見えて来ましたので「信心」について私なりに書いて見ようと思えました。信心についての私の今までの対応は、「信心か:」、「信心ね:」等、不遜な対応でした。改めて、「信心」について自分に問うてみることにしました。

ついては、どうして「信心か:」、「信心ね:」等の対応になるのか、それは私自身、「おかげ」を受けた実感が無いからではないか。確かに、今までの人生を振り返って自分の身に起きた様々な出来事について、後知恵で、「あれはおかげであった」と説明出来ても、心から得心出来ているのか。残念ながら「不可」でした。では、どうしたら心から得心出来る様になるのか。その方法が分からず、途方に暮れます。

ここで、自分の置かれている状況について、思いを巡らすことにしました。現在、私は一人で暮らしています。新型コロナウイルス

イルス感染拡大の中、一日中、人と話すことなく過すことも多々あります。あと数年で後期高齢者となる年齢ですので、目に見えて身体的機能の低下が自覚できます。私の今置かれている状況下では、確かにそれなりの孤独感なり、今後についての心配があります。しかし、不思議と不安に駆られたりはしていません。なぜ、不安に駆られないのか。考えて見ました。

畢竟、私の現在の有様は、自分が自覚していない様々な「おかげ」の結果であると。である以上、現実を受け入れ、何も不安に駆られる必要はないと。意識せず、自覚のないまま、「おかげ」を受けたことを何処かで得心していたのでしょうか。

そう思うと、今まで漫然と奉唱していた『神前拝詞』の前半の文章が、心に響いて来ました。そうすると、ある著書の中で『誰かと真につながっている』『自分は一人ではない』という感覚は、あらゆる人間の幸せにとつて、決定的に欠かすことのできない要素なのだ。』という文章と出会いました。この「誰か」を「金光様」と置き換えたらどうでしょう。これで、自分の「信心」についての希望が見えて来ました。



「教師信徒研修会」が開かれました

去る6月5日(土)午後1時30分から、金光教東京センター3階ホールを主会場に、「教師信徒研修会」がオンラインで開催されました。参加者は14教会より34名でした。

開会行事の中で、連合会長山田信二師(横浜西教会)は「この研修会は昨年開催の予定であったが、新型コロナウイルス対応から開催を断念する事態となり、今日オンラインで開催できることは大変有り難い。浅野先生の講話を聴かせて頂き、信心の素晴らしさ、信心する喜びを噛みしめ、信心の喜びを語り伝えていく私達にならせて頂きたい」と挨拶されました。

その後、司会より日程説明と講師の紹介が行われ、講師の浅野善雄師(東京都本中野教会長)が「縦横有神(じゅうおうゆうじん)〜信心の喜びを語ろう〜」との講話で話されました。以下に講話の要旨を記します。

はじめに

コロナ禍の中、明るい話題より暗い話題が多い今日、「信心の喜びを語ろう」をテーマに研修されることは、時宜を得た良いテーマ設定である。信心の喜びをもって世の中を明るくする、信心の喜びを語る行動が皆さんに生まれてくれば有り難いと思う。

私達が信奉する天地金乃神様は、天地がご神体で人間も生かされて生きている。どこにいても神様の中であり、生神金光大神様の取次をおして、いつでも、どこでも、どんなことでも神様にお願いしておかげを受けることができる。そのことを「縦横有神」という造語をもって講題とした。

1. 「信心する」とは、偶然なのか、神様のおかげなのか

「肉眼を置いて心眼を開けよ」という教えがある。物を見る肉眼から、見えないものを見ようとすると神様の眼、「神眼」で事柄を見ていく、それが信心ではないかと思う。

信心に反発していた大学時代、父が朝の教話である信者さんがおかげを受けた話をした。その教話に対し私は、「お父さん、さっきの話は何がおかげなのか、偶然ではないのか、ただ運が良かっただけだ」と問うと、父は「事柄の中に神様を見出して有り難い気持ちになれば、そこから生き方とか生活の仕方が変わってくる。それをただ運が良かったとか、ついていたというのでは、その場限りになってしまう」と話してくれ

た。この50余年前の父とのやり取りを今でも鮮明に覚えている。後々御用させて頂くようになってから、何度も当時のことを思い返し、事柄の中に神様を見出していく、言葉を変えて言えば肉眼を置いて神眼で見えていくという、信心の大切なところを教えてもらった。

2. 神意を求め 「ふと思うは神心、あれこれ思うは人心」。

教祖様は42歳の時、九死一生という大病を患われたが、信心の徳をもって神様が熱病では助からないので、のどけという病気にまつりかえしてやったというお知らせを頂かれる。体調が十分でない中、せめて月の1日、15日、28日の三日は、神様に心を寄せる日としてお参りをされた(2月の三日参り)。教祖伝に「文治の思いつきではあったが、神が思いつかせてくださったもの」とありがたく受け取り」と記されている。神様が思いつかせてくださったと教祖様は受け取られている。

次に、教祖様の弟の香取繁右衛門さんの口を借りて、金神がお広前の建築をしたいから、用立ててほしい、協力してほしい、との頼みがあった(金神広前建築の頼み)。教祖様は神様のお頼みとして受け取られて、農業の合間に金神広前の建築のお手伝いにも行かれた。「腕がはれて痛んだ。しかし一日休んだだけで、後は農作業をしながら自然に痛みが治まった。文治はこれを金神の

講師の浅野善雄先生と参加者(画面上部)



おかげであると喜び、以後たびたび手伝いに通った」と教祖伝に記されている。痛みが取れたのを自然に治ったとは思わず、それを神様のおかげであると喜ばれたということである。

3. 「思いわけ」の稽古で、わが身を生かす

教祖様の子どもさんが疱疹に罹られ、一人は死んでも二人は助かるという事跡がある。教祖様は子どもさんが一人亡くなるが、二人は助かったと、助かったことに力を入れてお礼を申されている。神職が「三人が三人とも良くなっても、ここまで手厚いお礼をする人はいない。なんと思いわけのいい人じゃ」と語ったと記されている。私共も思いわけの稽古を行うことが大事である。

次に私の体験談であるが、8年前の正月明けに風邪かな、少し喉がいがらっぽいなと感じ、軽い気持ちで耳鼻科に行き検査を受けたところ、異物が二つ見つかった。一つは良性でもう一つは判断がつかず、再検査が必要であった。私は一つが良性であったことが大変嬉しく、有り難く思った。つい疑わしい方に力が入るが、常人様にもお話をして、自分にも言い聞かせてきた「思いわけ」の稽古の証として、そのような受け取り方ができたことを有り難く思った。

4. 信心はブレキでなくアクセル

これは私が信心に目覚め、学院に入学を志すきっかけを与えてくれた安田好三先生（小田原教会）から学んだ教えである。つ

まり、人生を前に進ませる力、問題から逃げない生き方、問題を乗り越える力、それを信心によって得ることができるとい意味でアクセルと仰ったことに後年気づいた。

5. 当たり前前にお礼と感謝の生活をー入り口と同時に出口も大切にー

食事の時、食前訓と食後訓を唱えているが、私は小便、大便する時には排泄訓を唱えている。「神は体の毒を日に日に大便小便で取ってくださる」という教えがある。人工透析や直腸がんを患った身内から学んだのは、食事を頂く入り口と同様に、大便小便を出させて頂く出口にもお礼をする、その大切さである。

6. 信心の喜びを伝えよう

縦横無尽にお働きくださる神様、いつでも、どこでも、どんなことでもおかげが頂ける神様、つまり縦横有神のこのお道の信心をさせて頂くお互いは、いつでも、どこでも、どんなことでも神様にお願ひして、おかげが頂ける。そのことを独り占めしないで、この有り難いという思いをもって人に伝えていく。人が助かるということ喜びとされる神様の願ひ、その神様の願ひをわが願ひとして、信心の喜びを語っていく。今日お話ししたことが皆さんの参考になれば大変有り難い。

その後、質疑応答を行ない、信徒2名か

ら、講話の感想と自らの信心にどう生かしていくか、について発表がありました。原田伸一氏（丸子教会）は、「講話に感銘を受けた。現代をどう生きていけばいいのか、考えさせられた。心を強く持たないと流されてしまう。これから難儀にならない生活をしていきたい」

また志村等氏（甲府教会）は、「素晴らしい講話を聴いて感動した。先生方も若い時には苦労して、心の戦いをして、その中を乗り越えて現在があると聞いて、私も同じような気持ちを持ち、今信心をさせて頂いている。思いわけと気づきが、金光教の一番大切なことである。これを機会に一層信心に励みたい」とそれぞれ語られました。（4ページ中段へ↓）



研修会中の参加者の様子
(PC画面)

2021 (令和3) 年度

生神金光大神大祭日程

教会名	日 程
甲府教会	10月17日(日) 13時30分
南甲府教会	10月18日(月) 11時
小田原教会	10月24日(日) 14時
登戸教会	10月24日(日) 13時
横浜西教会	10月24日(日) 13時30分
大明教会	10月31日(日) 13時30分
横須賀教会	11月3日(祝) 13時30分
生麦教会	11月3日(祝) 13時
丸子教会	11月3日(祝) 11時
相模原教会	11月3日(祝) 14時
平塚教会	11月6日(土) 13時
子安教会	11月7日(日) 13時30分
鶴見教会	11月11日(木) 13時
野毛教会	11月13日(土) 13時30分
大磯教会	11月14日(日) 13時30分
武蔵小杉教会	11月14日(日) 11時
神奈川教会	11月27日(土) 11時30分
藤沢教会	11月28日(日) 11時

(↓3ページ下段より)

閉会行事では、連合会副会長で信徒部長の山口和賀雄氏(子安教会)が、「とても良いお話を伺って有り難かった。今日はリモートで開催できたこと、とても良かったと思う。金光教の初級を勉強する身として、浅野先生のお話からいろいろ気づかされ実践していきたいと思った。初級から少し信心が高まったように思う。ご参加くださった皆様に御礼申し上げます」と挨拶され、続いて閉会の御祈念を頂き、午後3時40分に終了となりました。

(報告 南清孝)

◆お知らせ◆

○来年度は神奈川県下に教会ができて130年の節年を迎えます。

節年を迎えるにあたり、ただいま、これまでの130年の振り返りとともに、未来へ向けて開かれていく連合会、教会を願って、教師部、信徒部、運営委員会で記念事業の企画を進めております。

この『かりん』やホームページでも、随時お知らせしていきますので、どうぞお楽しみに。



〈な・が・れ〉

「只々 お礼と感謝の気持ちで」

鶴見教会 内田政宏

鶴見教会は令和二年十一月十一日、生神金光大神大祭並びに鶴見教会布教九十年祭・新築落成奉告祭、併せまして、鎌倉教会開教九十年祭、更には、統合の儀を仕えさせていただきました。当日は天候にも恵まれ、全ての行事をつつがなく終えることができました。ひとえに神様の大いなるお働きと、親教会を始め手続教会、関係教会の諸先生方、そしてご協力を賜りましたご信徒の皆様のお祈り添え、お力添えに、お礼と感謝を申し上げます。

この日を迎えるに当たり、当教会に於ける波乱の十年が思い浮かびます。教会長の大病、ご息女美穂郎女のご帰幽、鶴見より大磯へ、更には鎌倉への二度にわたる遷座、新教会の建築など、教会長を始め、奥様先生、若(智行)先生のご苦労は如何ばかりであったかと拝察いたします。

その中で智行先生の教師拜命は、信徒一同に大きな希望と喜びをもたらして下さいました。初代教会長浅次郎先生は常々、「本気になれば」「信心辛抱だ」とお諭し下さいました。鶴見教会は一步を踏み出しました。この一步が、大きな一步となるよう祈念いたします。先ずはお礼と感謝の気持ちを込めまして。

金光教神奈川県山梨教会連合会

発行者 山田 信 一

〒245-0017 横浜市泉区下飯田町926・23
金光教横浜西教会内